

パプリカの栽培技術の確立
第1報 栽植密度が生育・収量におよぼす影響

深田直彦・黒木利美・富永 寛 (宮崎県総合農業試験場)
Naohiko FUKADA, Toshimi KUROGI and Hiroshi TOMINAGA :
Establishment of cultivation technique on paprika
1. Effect of planting density on growth and yield

パプリカは、イタリア料理ブームや消費者の健康志向を背景に年々需要が伸びている。しかし、栽培技術面で不明な点が多いため、国内での生産はまだ少ない。このことから、演者らはパプリカの産地形成を目指して、体系的な管理法を検討している。本報では、栽植密度が生育・収量におよぼす影響について述べる。

1. 材料および方法

供試品種は‘スピリット’を用いた。試験区は、a当りの栽植株数を139株、185株、278株、370株の4水準で設けた。播種は1999年8月25日に行い、50穴セルトレイで育苗し9月20日に定植した。畦幅は各区共通に180cmとし、株間を変えることで区を設けた。仕立て方法は主枝2本仕立てとし、側枝は1～3節で適宜摘心した。施肥はa当たり、基肥がN3.0kg、P₂O₅2.5kg、K₂O2.0kgで、追肥はN3.0kg、P₂O₅1.5kg、K₂O2.0kgとし10回に分施した。最低温度は18℃設定で管理した。収穫は12月20日から2000年6月6日まで行った。

2. 結果および考察

生育：主枝長は各区とも大きな差がなかったが、主枝節数は密植にするほど減少する傾向が認められた。この動きに従い、主枝の節間長は密植するほど長くなった。また、密植により茎径が小さくなるとともに、茎葉重の明らかな低下も認められた(第1表)。

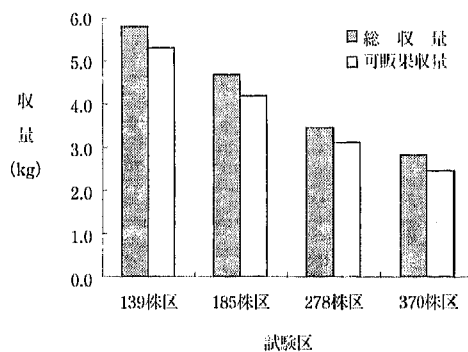
第1表 栽培終了時の茎葉の状態 (株当たり)

区名	主枝の状態				全茎葉重 (g)
	長さ (cm)	節数	節間長 (cm)	茎径 (mm)	
139株区	125.8	26	5.1	12.2	1,490
185株区	120.6	23	5.5	11.7	1,248
278株区	126.5	21	6.3	10.6	1,048
370株区	123.0	21	6.2	10.6	890

注) *主枝の5～6節位間

収量：株当たりの収量は、密植により大幅な減収がみられ、370株区を139株区と比較すると、総収量、可販果収量とも約50%減収した(第1図)。しかし、a当たりの収量では、密植による株当たりの減収よりも株数増加の効果が上回ったため密植ほど多収を示した。この傾向は可販果収量でも同様であり、密植するほど可販果率は減少したが、密植ほど多収であった。なお、一果当たりの重さは、各区とも大きな差はなかった(第2表)。

以上の結果、パプリカの2本仕立て栽培の栽植密度は、収量面だけをみると、本試験の370株区よりもさらに密植にすることの有利性を否定できないが、作業性や苗数等のコスト面から推測すると、a当たり278～370株程度が適当と考えられた。



第1図 株当たり収量

第2表 総収量と可販果収量 (a当たり)

区名	総収量			可販果収量			
	果数	重量 (kg)	比	1果重 (g)	重量	比	可販果率 (%)
139株区	4,829	805	100	167	738	100	91.6
185株区	4,727	865	107	183	779	106	90.1
278株区	5,424	963	120	178	862	117	89.5
370株区	5,654	1,042	129	184	906	123	86.9